

平成23年度社会福祉施設管理者海外研修・調査 レポート3 ～事前調査、現地調査、事後調査～

特別養護老人ホーム甲寿園 園長 狭間 孝

(2) スイスでの高齢者施設の様子 9/13 (火)

チューリッヒ市役所社会福祉課 ビュルガーアジール・プリュンドハウス (高齢者施設)



玄関



居住の高齢者から説明



テラスでの食事



食堂



チューリッヒ市より行政説明



チューリッヒ市が運営している高齢者施設を会場に市社会福祉課より社会福祉システムの概要説明を聞いた。チューリッヒ市役所の担当者から高齢者政策を伺い、施設見学をさせて頂いた。こちらでも、行政の責任者は、女性であった。行政の説明によると、施設は、歴史を感じさせる建物を改修し、廊下には、絵画が飾られ、落ち着いた雰囲気だった。一人の利用者の居住スペースを見せて頂いた。

この高齢者施設は1990年に設立したチューリッヒ市立の老人ホーム。施設は、「自由でできるだけ依存しない、同時に安全で快適な暮らし」を理念に運営されている。シングル55部屋、ツイン16部屋、利用料は、自己負担、シングルルームで1日1部屋110スイスフランの設定である。

自ら生活できる軽度な方のように見えた。レストランのようにゆったりとした食堂があり、外のテラスでは職員が昼食を食べていた。落ち着いた住まいとしての高齢者施設のほんの一部分ではあったが、住まいの様子を見ることができた。日本で言うなら、有料老人ホーム、ケアハウスであった。

チューリッヒの街



チューリッヒ中央駅前



路面電車



リマート河よりチューリッヒ市街遠望

路面電車を利用しながら、チューリッヒの街を歩いた。スイス最大の都市で、ショッピング店が多く、流通が非常に進んでいることがわかる。チューリッヒ市は、国際サッカー連盟(F I F A)が置かれている都市でもある。

アルバイツハイム ワンゲン (身体障害者授産施設)



アルバイツハイム ワンゲン



作業棟



作業風景



椅子製作作業



選挙公報発送する作業

1928年に設立した視覚障害者施設を前身として1997年に規模を大きくして発展したのがアルバイツハイム。24歳から72歳までの35名が施設内に居住している。施設を生活と仕事、工場が一体となっている。1928年開設。最初は視力障害の方のホーム。

居住スペースは、全室個室。身体障害、精神障害者が生活し、それぞれに合う仕事を行っていた。この施設は、2008年に創立80周年を迎えたと説明を受けた。入所するには、18歳以上であり、集団での生活のルールを守ること。規則を守ること。そして、支払い能力(年金)がある36名が生活している。50名弱の職員が入居者の手伝いをしている。個室、2~3人室、シャワー室が基本。できるだけ自立した生活、できない事はサポート。個室の様子などを見せて頂いたが、それぞれ、個性豊かな生活があり、障害があっても、働きながら、ゆったりと暮らしていけることが理解できた。

クリッペン・ベトリーベ・ローレン (保育施設)



芝の園庭



保育室



保育室

クローテン市の公共保育施設。30名前後の児童に対し同じくらいのスタッフが勤務している。保育施設の玄関では、子供たちが、色とりどりのチョークを使い、落書きを楽しんでいた。

訪問した時は、コンクリートに寝そべて身体の形を映していた。「子供を撮らないように」ということで、残念ながら玄関風景は映していない。園庭は、全て芝生に覆われ、室内には木工遊戯、絵本等が置かれていた。

施設の責任者からは、保育方針を伺うことができた。施設長は、日本からわざわざ、自分の施設を視察に来ることに感激し、パワーポイントの準備を進め、1時間程度の熱弁だった。施設見学の時間が短くなり、全ての施設、環境を見ることができなかつたことが心残りであった。

学童保育を行い、施設長の方針でこの保育施設に来ている時間帯については、ゲームボーイ、携帯電話等は禁止していると聞き、発達期の子供達への“ゲーム脳”（前頭葉が発達しない）への対策、芝生の広場で遊び、コンクリートの床に自由に落書きができる環境を提供していることなどを聞いた。保育室をゆっくり見ることができず、芝の園庭を見ただけに終わったことが残念であった。



施設長（左より2人目）

おわりに

スウェーデンの福祉施設、行政担当者の説明や文化視察、ヘルシンキでの文化施設視察のガイド、スイスの福祉施設、行政担当者、文化視察など、それぞれの国の様子や日々の暮らしぶりを知る機会となった。

日本の福祉と北欧の福祉を実際に見ることは、貴重な見聞であり、事後の調査、研修がさらに体験を充実したものになるだろう。

スウェーデン・シグチュナー市においては、福祉を多様化するための民間活力を入れる取り組みを行っているという説明を聞いた。スウェーデンでの高福祉を支えているのは高負担と言うことであるが、日本で出版されているスウェーデン関連の書籍を多く読破した。「持続可能な制度」というキーワードが訪問中、何度か聞いた。日本型の福祉の姿はどうあるべきなのか。視野を広くしつつ、個別の課題について、さらに研鑽を深めたいと思う。ただ1点、今回の海外研修の中で、介護機器センターを見学したが、私が奉職している甲山福祉センターは、介護機器の導入と活用について、スウェーデン以上だと実感してきた。比較ができるという事は、やはり、この目で見えてきた者の強みでもある。

このような海外研修派遣を推薦して頂いた甲山福祉センター理事長、法人50周年記念事業のラストスパートを私不在で推進してくれた法人内の事業委員、施設長の皆様、甲寿園の職員に感謝を申し上げます。

海外研修で得た成果を機会があれば、何度でも写真、通訳の内容、行政説明等を話していきたいと考えています。皆様、ありがとうございました。



海外視察団全員で記念撮影

財団法人社会福祉振興・試験センター

平成23年度社会福祉施設管理者海外研修・調査

期間 平成23年9月5日～15日

研修都市：ストックホルム（スウェーデン）

ヘルシンキ（フィンランド）

ルツェルン・ベルン・ツェルマット・チューリッヒ（スイス）